

椿説弓張月

下卷

曲亭馬琴作
和田万吉校訂



黄 225-4
岩波文庫

椿説弓張月 下巻 [全3冊]

1931年3月10日 第1刷発行
1990年3月8日 第7刷発行

定価 460 円
(本体447円)

校訂者 わ だ まん きち
 和 田 万 吉

発行者 緑 川 亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-302254-8

岩 波 文 庫

30-225-4

椿 說 弓 張 月

下 卷

曲 亭 馬 琴 作
和 田 万 吉 校 訂



岩 波 書 店

鎮西八郎
爲朝外傳

椿説弓張月拾遺 卷之三

東都 曲亭主人編次

第五十一回

南原城に入て妖婦利勇を惑す
佳奇呂麻に赴て謀師王女を迎ふ

鎮西八郎爲朝は。辨嶽の麓なる。山神廟にて。散錢櫃を打開き給ふに。思はずも一人の美女。櫃の中よりあらはれ出たり。その形勢。いと怪しかりければ。走り避んとする袂を引とめて。緣由を問たまへば。女子はいたく怕れたる氣色にて。しばしが程は得も回答ず。しばし問れてやうやくにいふやう。わらはは此山の北邊なる。保似村の村正。某甲が女兒にて。名をば海棠と呼れ侍り。いぬる秋。采女司にえらみとられて。首里の王城へ参るべかりしに。はからざる都城の騒動。浪風しくめる世となりて。えも参らずなりし幸なさ。只いたづらに蟹をる折からこの驍方に。矇雲國師の大將に。全廣といふ猛者が。夥の軍兵を領て。わが村に乱れ入り。老たる駈き

差別なく。塵にし侍る程に。わらはが親同胞も。あへなく命を隕せしが。わが身は刃の下を潜りて。不思議に脱れ去にけれど。なほ追撃るゝこともや。と思へば悲しくおそろしく。この古廟に走り入り。ふかくかくろひ侍りしなり。おん身も又。蒙雲法王の筑登之にて。罪なきものを砍殺し。快しとし給はゞ。今は命を惜むにかひなし。愁に顯身の。世に存命ていくばくの。憂を見るめの涙の磯に。あまとなるとも乾かぬ袖は。浮む瀬もなき歎なり。もし又首里の兵ならで。南風原の親方の。恩顧の人におはすならば。もろともにこのよしを。訴まうして國の爲。わが身の爲に親同胞の。冤を雪がし給ひね。といひかけてよゝと泣聲は。友に離れし浦千鳥。さては亦餘吾の松に。羽衣を掛失へる。天津少女に彷彿たり。爲朝はつくぐと。緯の來歴を聞て。眉うち顰。否。われは蒙雲が兵士にあらず。日本國より漂着せし。爲朝と呼るゝものなり。近曾南風原に身を倚れば。汝が冤苦を訴得させん。さはあれ力及ずとも。親同胞の枉死を見捨て。いひがひなくも脱れ去りしは。孝節兩ながらとる所なけれど。教なき女流のうへには。ふかく咎むべきにあらず。思ふやうあれば。南風原へ將てゆくべし。とくこの櫃に入れかし。と宣へば。海棠は世に憑しきおもゝちして。落る涙をかき拭ひ。數回ふし拜みけり。かくて爲朝は海棠を舊のごとく。散錢櫃に潜して。鵲と熊の頭をも。その中へ投入れ。楚と蓋してこれを脊負ひ。南風原を投て歸り給へば。その日もはやく傾きぬ。この朝大臣利勇は。四門を成る筑登之等に下知し。爲

朝既に。三日の約に乖きてかへり來ず。よしや今日に及びて立かへるとも。決して城中へな入れ
 そ。汝等もし由斷して。門内へ入るゝことあらば。軍法をもて罪すべし。といと嚴重に命ぜしか
 ば。皆衆うけ給はつて。正門後門の番卒を増加へ。これを守ること寇を禦ぐに異ならず。かくと
 はしらず爲朝は。散錢櫃を脊負ひつゝ。城に入らんとし給へば。番卒等遽しく。手にく捍棒を
 打ちあはして遮とどめ。やをれ爲朝。汝既に三日の約に乖きながら。阿容々々と歸り來たる。面
 の皮こそいと厚けれ。吾們親方の仰を稟たり。今は一足も入るゝこと叶はず。命をしくば銷ても
 失よ。幸にその首を。全すべきに。と罵れば。爲朝聞もあへず大きに怒り。小ざがしき燕雀
 の共嘯り。汝等がしる所にあらず。われおのづから處分あり。妨すな。といきまきて。逆茂木の
 ごとく左右より。うち合したる捍棒を。足もて丁と拂ひ退け。進み入らんとし給へば。こは狼藉
 なり。とのゝめきて。拿たる棒を閃かし。群立て打て蒐るを。爲朝物ともし給はず。夏の雨より
 なほ繁く。頭の上へ打かくる。捍棒長鎌鯁尾の。槍を颯て。やと引よし。あるひは踏折り掻遣捨
 人なき郷をゆくごとく。百歩あまりぞ入り給ふ。二の城戸を守る筑登之等。この形勢を見て舌を
 巻き。入れ立てはかなはじとて。門扉を礮と鎖したり。當下爲朝は。するゝと歩みよりて。散
 錢櫃を肩ひたるまゝ。二の城戸に手をかけて。一聲高く推たまへば。關木めりく。と中より折
 れて。城戸は左右へ發と開く。その膂力鴻門に。沛公を救ひたる。樊噲にいやましたれば。ほと

り近き兵士等は。ひらく扉にあふり立られ。或は頭をうち碎れ。或は手を負ひ。腰を折かれ。半死半生なるもの數十人。辛じて恙なきも。群がる羊の頭を低て。猛虎に向ふに異ならず。舌を吐手をつかね。みな阿容々と通しけり。さる程に大臣利勇は。事の趣を聞て大きにおどろき。ふかく松壽を恨みて。喃々と呟きつゝ。按司親雲上等を呼集合。みづから器械をとつて。正殿に立出。武藝ある里之子二十人に。おの／＼半弓を取らして。左右に侍らし。もし爲朝奥ふかく進み入らば。乱箭にて射てとれとて。その準備大かたならず。松壽はひとり苦々しく思ひしかば。正殿に走り入て。利勇を諫ていへりけるは。爲朝は蓋世の勇士なり。威をもてこれを制しがたし。國の大幸は。人を得たるにますことなし。願くは親方。はやく劔を解。弓箭を去らし。辞を安寧にし。礼儀をもて彼人を款待し給へ。もししからずは。福却禍の端とならん。といはせもあへず。利勇忽ち地眼を睜り。汝いまだ醒ずや。かゝる癖物を吹擧して。再び禍を惹出したながら。者奴を搦捕んとはせず。なほ吻を動こそ奇怪なれ。もし露ばかりもその非をしらば。爲朝が首級をとつて。われに見せね。といきまき高く。心づよくは責れども。いまだ戰慄は止ざりける。かゝりし程に爲朝は。前後左右より。槍襖をつくりかけたる。筑登之二三十人に送られながら。悠々として來給へば。あれよ。／＼。とばかりに。今まで勇る按司親雲上。里之子に至るまで。互に面をあはしつゝ。惘然として。する所をしらず。利勇は氣色を見せじとて。豕に似たる聲を

ふり立。東方の浮浪人。既に約に乖きながら。なほ恥をしらず。身のおき所なきまゝに。物に狂ふはいかにぞや。汝樊噲が勇ありとも。われ亦項王の威なからんや。縦鐵壁城は破るとも。一言の約は破りがたけん。推參なり。と罵れば。爲朝呵々と冷笑ひ。怪有なることを聞くものかな。大臣今幼主を補佐し。信義をもて擾乱を。鎮んとすべきものが。言を兩端によして。義士を容れず。これ民に譎りを教るにあらずや。夫辨獄は。その行程近きにあらず。加以山川の險阻あり。翅なくては翔も歸りがたし。爲朝昨夜件の山を出るといへども。路遙なれば今に及べり。更に三日に約を違たるにあらず。且三箇條は。悉くなし果たるに。いたづらに日を數へて賞なきは。人の功を奪ふなり。これ見給へ。といひかけて。眞たる櫃をおろし給へば。利勇はいまだ實事とせず。頭を左右へ打掉て。いへばとていはるゝものかな。思ふに汝。囂雲に心をよして。怪しき櫃を。眞來れるに疑ひなし。ものどもその櫃をうち壞て。檢見よ。と下知すれば。筑登之等阿と回答て。拿たる槍を突揃へ。一度に刺ん。と競ひかゝるを。ものゝくしや。と爲朝は。眼を瞪らし見かへり給ふ。その勢ひに辟易し。衆皆尻居に撲地と坐す。利勇が左右に立たりける。按司應雀。親雲上呂録とて。武藝力量の聞えある上官二人。袖かきあげて走りかゝり。蓋を開かんとして。たりしが。忽地に眼眩みて。もろともに倒れたり。里之子等はこれを見て。二人の上官爲朝に。投伏られたりとや思ひけん。利勇にあやまちあらせじとて。拿たる弓を彎かため。蟲の飛ぶがご

とく射かくれども。爲朝の身にたゞで。散錢櫃に犇々と。たつ箭に櫃を射たふせば。内に一聲叫苦と叫びて。獨の美人輦び出たり。只これ雲を出る春の月の。梢の花にかゝるがごとく。また彼宮城野の櫃の芳宜。更に都に匂ふに似たり。利勇は思ひかけざれば。あれはいかに。とばかりに直と呆れて目を細くし。と見かう見れば按司親雲上。筑登之。里之子等は思はずも。器械を憂離と捨。猛に鬚を搔拊て。ゆがめる官帽を押正し。膝を立て。頤を反らし。縦に見。横に打ながめて。意彼首にあらざるものなし。此ときまでも陶松壽は。默然として居たりけるが。忽地席を拍て爲朝にすゝみ向ひ。喃御曹司。時今播乱の際に逼て。士民おのゝ／＼馳預狐疑す。この故に。大臣かろ／＼しく人を容給はず。かならず怪しみ給ふべからず。さても何の故ありて。この女子を伴ひ給ひたる。緣故。聞まほしく候。と詰問ば。爲朝莞爾とうち咲て。この件の事につきては。種々の來歴あり。某きのふ。辨嶽に大鳥を射て。鷲巢山の麓に追ひゆき。終にこれを刺留る折から。兄弟とおぼしくて。二人の少年。如此々々の衣を着たるが。敵に追れて走り來つ。迺とも脱がたしと思ひけん。彼等遂に引かへし。追敵の兵士と血戦して。矢庭にこれを撃とつたり。某樹蔭より。その爲体を見るに。彼少年等相議して。速に首里へ赴き。緯のよしを囁雲に。報知んといふ。こは問ずとも少年等は。國賊囂雲が手のものなり。と猜したれば。某一喝して樹間より走り出。忽地件の少年等を撃とつて。その首をうちおとすに。軀は立地に銷鏢て。二ツ

の首級は目前。熊の頭と變じたり。怪しき事限りなければ。臈て鷲の頭を搔切おとして。是彼ひとつに右手に引提。辨獄のかたへとて立歸るに。保似村とやらんの樵夫山兒等。蒙雲が賊兵に乱妨せられ。おのゝ痛癢負ざるはなく。路傍に仆れたり。爲朝こゝにはからずして。その消息をしるといへども。はや時後れたれば。賊兵を撃とむるによしなく。只懷中なる藥を與へて。しばし手戻を勸り。ゆき行て林原なる。山神廟のほとりにして。この女子に遭ぬ。よりて。その故を問ば。彼は海棠と呼れて。保似村なる村正の女兒なり。嚮に親同胞を。賊兵等に撃れ。いひがひなくも只ひとり辛じて脱れ去り。この廟内に躲れたりといふ。且この海棠は。王宮へ召るべかりし采女なれども。蒙雲が弑逆の騷擾によつて。その頃衣袴などは賜りながら。えも參らず。もし南風原へ歸る人ならば。扶引てわが爲に。冤苦を訴たまひね。といへり。爲朝木石にあられざれば。その哀傷を見捨がたくて。これさへに將て歸りしを。頻りに日を數へて。城中へ入られず。欲する所。今一トたび。大臣に見參して。緯の爲体を告まうさんと思ふのみ。絶て野心あるにあらず。無礼は許し給へかし。と實事虚言うちまぜて。審にに述訖り。輾びし櫃を引よして。三の頭をとり出し。松壽がかたへ指向給へば。利勇は松壽が回報を待す遽く椅子を離れて。爲朝に對ひ。われ眼は人なみに勝れて。大きやかなれど。才浅く智足らざれば。實の豪傑を認らず。幸に咎給ふな。御邊が撃とつたる少年は。毛國鼎が子ともに。鶴龜と呼れて。われを仇とし冤

ふもの也。既に前夜箇様々々の事ありし。しかれども。わが精忠を。君眞物の隣み給ひて。はからずもその夜さり。彼鶴を生拘り。松壽がすゝめによつて。如此々々はからはせしに。その計策合期せず。矇雲が伏兵。全廣等に刼されて。わが腹心の兵士。趙豹李虎を失ひしが。今更思へば彼鶴龜は。亦矇雲が幻術にて。假にそのものと見せたるのみ。實は彼等。赤瀬の碑のほとりにて生拘られしとき。首を刎られたるに疑ひなし。こゝにはじめて御邊の武勇によつて。矇雲が詭計をしる。わが歡びこれ一ツ。加旃。美女海棠を伴ひ。その冤苦を告たりしは。義あり信あり。その功賞せずはあるべからず。抑わが身名家として。世々高官を辱し。衣食満足りて。物乏しとも思ざりしが。いまだかゝる美人を見ず。虞舜は娥皇女英を辞せず。曹孟徳の英雄なるも。二喬を銅雀に携ざるを恨とせり。われ今この美女を容るゝとも。勇に爲朝あり。智に松壽あれば。矇雲が幻術も怖るゝに足らず。寔に御曹司は。人中の龍。海棠は亦女中の花なり。その龍も用ふべし。この花も愛すべし。倩惟るに。山南省なる大里は。南智念玉城に隣。北は首里に遠からず。防禦第一の間切なり。今われ歡びのあまり。御曹司を大里の按司とすべし。與那原。與古田。湧稻國より。島袋。高宮城に至るまで。十八ヶ處の属村を管領し。二百騎が將として。大里の城を守り。大功を立給ふべし。といふ。満悦面にあらはれて。手の裏反す勸賞に。爲朝頭をうち掉て。某させる績なし。今その女子の故をもて。按司とならんは。本來の情愿にあらず。

と推辞給へば。松壽遽しく小隊をすゝめ。御曹司。などてかくは謙退し給ふ。賢者は民を利して。國おのづから富といへり。大臣幸その人を得て。重く用ひ給はん事。抑國の福なり。推辞給ふことかは。と説諭せば。爲朝亦宣ふやう。しからばわれに所望あり。大臣もしかなへ得さし給はゞ。大里を守るべし。しかれども輒くは。聽給はじ。と宣ふを。利勇は聞もあへずうち點頭。何にまれいひ給へ。聽すべし。聽すべし。と回答しかは。爲朝はじめに領諾して。按司の班に入て席を正くし。某がねがはしきは。寧王女の事なり。大臣國の爲に忠義を盡さんとならば。寧王女を迎へ。大里の城に冊き入れ給へ。さらば爲朝副將軍となりて軍配せん。しかるときは國民みな。大臣の誠忠を稱賛して。嚙雲翼を失ふべし。と他事なくも宣へば。利勇且く沈吟して。いはるゝ所理あれども。王女は曩に。王命によつて。陶松壽に撃れ給ひぬるに。なほ存命給はんや。そは全く贖物ならん。今更往方を索ん事。わが力及がたし。と諾なはねば。爲朝かさねて。いなその事は心易かれ。某いぬる日はからずも。小琉球の島北にて。寧王女の必死を救ひ。やがて佳奇呂麻に將て歸り。ふかく潜し進らしたり。大臣これを迎とらんとならば。智勇の聞えある大將に。二三百騎の逞兵を授て。彼島へ赴し給へ。某亦伏兵となりて。嚙雲が賊兵を遮り留むべし。水陸既に計略を合するときは。嚙雲千里眼をもて。はやくこの事をしるといふとも。術なかるべし。かくのみいはゞ。なほ疑しく思はれん歟。わが妻白縫は。志氣あるものにして。

その智勇をさく／＼丈夫に劣らず。惜かないぬる八月。風濤の難に係り。瀾を披いて水屑となりぬ。しかるになほ怪しきは。白縫が魂。いつの程にか寧王女に憑りて。その心操を果さんとすればにや。動靜云爲彷彿として。わが妻に異ならず。こゝに一世の因縁を尋れば。爲朝少かりし時故あつて。放せし鶴をこの國に索かね。舊虬山の麓にて。王女廉夫人に名告あひ。玉と鶴とを交易たる事あり。さればそのときわが與し。蛇の珠は仇となりて。王女はふたゝび流離の。身となり給ふと聞けば亦。憂をわが身のうへに比べて。昔を忍ぶおもひあり。いとも怪しき亡妻の。恩愛によつて。如此いふには候はず。首尾は箇様々々と。おちもなく説しらし。もしわが言を用ひ給はゞ。公私の幸これに過じ。と憚る氣色もなく宣へば。松壽は。小膝を敷と拍。大里按司爲朝の宣ふ所。忠信恩義を失はず。王女を毛國鼎が傳子也。といはせしは。蒙雲が所爲ならん。王女存命の事は。怪むに堪たれども。爲朝の亡妻。その魂を憑するといへば。王女にして王女にあらず。かゝる烈女の志を奪ふときは。後日の殃脱れがたけん。はやく疑を決して。使を遣し。烈女の魂を迎給へ。しからば夫婦恩義を感じて。國のため大臣の爲に。等閑にすべうもあらず。躊躇給ふことかは。とすゝめ説ども。利勇は左に右回答はせで。先肚の裏にて尋思しつ。われ今この海棠を容れて寵愛せば。衆人必ず色を好むといはん。譏の門を塞んには。この便宜に。王女と名告る女子をもて。爲朝に妻はし。彼にも美女を抱するにしかず。よしや王女世に

在りても。按司の妻たり。矇雲滅び。王子早世すといふとも。王女は王位に即がたし。そのときわれ。三省諸島を掌握して。中山王とならん。誰かこれを奪へりといふべき。しかなりく。と計較既に定りて。莞然と咲。げに物の情は奪ひがたし。大里按司の亡妻白縫とやらん。王女に假着するときは。王女は即その人の妻なり。速にこれを迎とりて。二世の心操を盡さすべければ。松壽は二百餘騎を將て。五艘の軍船を浮べ。爲朝に先だちて。佳奇呂麻に赴くべし。といそがせば。爲朝はおもひの外なる氣色にて。利勇にむかひ。白縫が魂。しばし王女に憑ることありとも。某ふたゝび娶るの意なし。東方一葉の浮浪人として。ゆくりなく國王の婿とならば。王女を辱るのみならで。群小に妬るべし。この事のみは承引がたし。と宣ふを。利勇は絶て耳にもかけず。事既に定りぬ。松壽は夜の中に進發せよ。われは阿公をもて。縁由を王子に聞へあぐべければ。爲朝は衣冠を整へ。拜賀あるべし。と信だちて。やをら海棠が手を把て。應雀呂録。里之子等を隨し。青宮へとて入りにければ。燭点すころとなりぬ。

第五十二回

高樓に矇雲海氣を認る
大里に爲朝王女を娶る

東風平の按司陶松壽は。その夜俄頃軍兵の部して。小祿の湊口に艤し。次の日の順風に。佳

奇呂麻を投て漕しけり。松壽は原來才智凡ならざるものなれば。この時つくぐと思ふやう。利勇は錦の褥に臥す狗のごとく。能もなくて魚肉に飽き。人をしらざれば。聖賢を見ても。これを吠るの類也。されば爲朝を。日本國の英雄なりとしらずして。はじめは是を用ひず。今又僅に美人を携來れるを賞美して。忽地に按司とす。かくて賢を招き。士を用るといふべきや。遮莫。爲朝大里の按司となりたまふ事は。寔に國の幸にして。王女のふたゝび世に出給ふは。天孫氏の餘德なり。賀すべし。とひとりごち。こゝろにふかく歡びけり。これより先爲朝は。直に衣冠を整て。正殿の階下に踞し。王子を拜し奉るに。王子は誕生ののち。いまだ期月にだも過ぎれば。さながら木偶人に異ならず。阿公是を抱きて。高坐にあり。即爲朝を殿上に召昇し。大里の按司たるべきよし。亦王女を妻し給ふ旨を聞えしらし。偏に忠勤を抽て。矇雲をうち滅すべし。と仰下されしかば。爲朝恩を謝して退出給ふに。諸按司親雲上等。駭然としてこれを目送り。さても怪有なる。僥倖かな。と呟きてこれを羨み。これを妬も又多かり。かゝりし程に爲朝は。詰朝筑登之佐二人を郷導とし。雜兵廿人を給はりて。大里の城に赴き。城中の士卒に對面して。やがて十八ヶ村の村正等を呼集合。稅歛を薄くし。法令を正しくし。來れるを賞し。叛くを罰し給へば。上に枉れる俗吏なく。下に僻る頑民なく。衆皆赤子の母を得たるこゝちして。かゝる良將の下風に立ん事は。世に有がたき洪福なりとて。いと憑しき思ひをなせり。か

くて第三日に及びて。爲朝は城中の軍兵を集令。擲に陶松壽が佳奇呂麻へ赴きしより。僕ればは
 や。歸り來ん日も遠からず。われ今夜子の刻に。百五十騎を將て城を出。眞和志の山蔭に屯して。
 松壽が歸るをまつべき也。されば昨夜間者を遣して。彼處の地利を撈間に。眞和志。字平の間
 に大河あれども。上は二股にわかれて陸に續く。その流れ海に入り。東のかた長川のほとりに高
 峯あり。これ兵を伏するに究竟の要害なり。功は義をしるにあり。もし臆して。敵を見て退くも
 のは。罪決して免しがたし。此旨よくくこゝろ得候へ。と説示して。手部速に定りしかば。
 その夜子の比に。主從百五十騎。密やかに城を出で。眞和志の東北なる。饒波。長川の間。樹
 だちふかき山蔭に屯して。松壽が王女に俱して。歸り來るを待ほどに。爲朝忽地思ひ給ふやう。
 鶴龜は佳奇呂麻に赴きて。今は彼處にあらんずらん。もし松壽にしられて。利勇に告らるゝこと
 あらば。そのたびは救ひがたし。とせんかくせん。と思ひたゆたひ給ひしが。又つくぐと思ひ
 かへせば。松壽は眞實に利勇を輔るものにあらず。彼が信やかにもてなすは。王子に忠義を竭さ
 ん爲歟。さらずは別に故あるべし。前の夜鶴が井に落て。忽地擒となりしとき。松壽ひとり利害
 を説て。これを助たりと聞ば。彼にしらるゝとも咄むに足らず。人の子をおもふにも。わが子舜
 天丸はいかになりけん。紀平治高間夫婦のものも。世になき人の數にや入りけん。妻子郎黨離散
 して。われのみこゝに漂着し。今一城の主となれば。よしや功成名は遂るとも。富貴を誰とと